2020年4月19日　　日本基督教団 八ヶ岳伝道所　復活後第一主日礼拝　　NO.1116
聖　　書　　ゼカリヤ書 9:9~10／ルカによる福音書 24:28~35
説　　教　　『 根っこのざわめき 』

二人の弟子は、復活したイエスが見知らぬ旅人に見えた。先へ行こうとする旅人に、弟子たちは強いて同宿を乞う(ﾙｶ 24:29)。道々弟子は旅人に、十字架(24:20)と復活の噂(24:23)について語り、旅人は旧約聖書の読み解きで応えた(24:26~27)。
二人の弟子に特段変化があったわけではないが、旅人を無理に引き止めたのは(24:29)、無意識のざわめきゆえではなかったろうか。その晩、弟子たちは目を開かれて、旅人が復活のイエスだと気づき、己自身の無意識に起こっていたことを自覚する(24:32)。

ここでは深度の異なるキリストとの出会いが語られている。私たちも案外こうした経験をしているのではないか。
大学生の頃、同年代の求道者が受洗していくのを尻目に、私は随分ぐずぐずしていた。解りもしない神学書を読んでは牧師と論争し、もがいていた。心の根っこはざわめいていたが、「復活の出来事が腑に落ちるまで」という基準を自分で決めていた。やがて己が傲慢さに気づき、自己基準を手放し、腑に落ちないまま受洗した。そして牧師になってもなお、半ば無意識頼りでやっている。

「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった(24:30~31)」。
人間側から知ろうとしても目は開ないが、キリストからの働きかけで私たちの目は開かれる。とりわけ興味深いのは、分かった途端に見えなくなったこと。
この感じ、根っこのざわめき頼りで来たキリスト経験から想像できる。見えて理解できること(認識範囲内)より、見えないままざわめく方が深い。

「風(霊)は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆その通りである(ﾖﾊﾈ 3:8)」。
霊から新たに生まれる時(3:7)、風(霊)を感ずるが、キリストは見えない。たとえ見えなくとも、私たちは霊によって必要なことを知らされる。
復活の風が吹き抜ける時、自分自身の根っこが明らかにされる(ﾙｶ 24:32)。復活のイエスが見えなくなったのは(24:31)、弟子たちの根っこにキリストが「受肉」したからだ。復活のイエスは使徒トマスに言った。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである(ﾖﾊﾈ 20:29)」と。

「高ぶることなく、ろばに乗って来る。雌ろばの子であるろばに乗って(ｾﾞｶﾘﾔ 9:9)」。イエスはこうした姿でエルサレムに入り(ﾙｶ 19:35)、十字架で死んだ。十字架から生じた見えない復活証言も、人間を高ぶらせることなく、ロバに乗るがごとくに淡々と宣べ伝えられる。
何も変わらないようでも、実り無きように思えても、愛と平和の福音は、静かに、確実に伝えられていく(ｾﾞｶﾘﾔ 9:10c)。目が見開かれ、復活によって己自身と出会った者は(ﾙｶ 24:32)、復活のイエスをそのまま語り伝えていく(24:35)。

復活は、一人ひとりを、限られた領域から永遠へと新たに生まれさせるだけに留まらない。
「わたしはエフライムから戦車を、エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ、諸国の民に平和が告げられる(ｾﾞｶﾘﾔ 9:10)」。復活が世を覆う時、戦車や軍馬、戦いの弓は絶たれるだろう。
復活の種子は世界中に蒔かれているが発芽率は低く、私たちは身近な山麓に種を蒔いている。やがて復活の東風(霊)はたっぷりと吹き、地上の争いや災厄から世を解き放つだろう。そうしたら野は、何を芽吹かせるのか。

★

≪おまけのひとこと≫
そもそも人は誰でも自意識過剰なものだが　それゆえ人は己自身をいっそう狭く閉じこめてしまう
キリストは囚われた私を解き放つ　内側からかけられた錠を外して　私は私にさえ縛られないのだ